服部應賀著

馬鹿ホ
ほ
ん
ち
ん

# 大妙藥

定價三泉五厘

A780

世界元祖

# 馬鹿利膏

第一眼を明らかにして紀が睫を見るけ我身をつくりて他の痛をあるの大妙薬なり

一 椅子脚気靴づれふよし

一 右の外及ばぬこゝろ心気をつくしこゝろ用て効あり

本家 石水阿武内製

48-7698

# 馬鹿大妙薬

効能試験書

服部應賀著

各様方益御機嫌能被遊御座恐悦至極に奉存候イヤ是ハこゝ呉服屋の引札のやうあゝ藥の能書とゝ見へぬ何業も當時い看板ハ偽が多く殊に俗人へさゝゝ布告新聞紙も婦女子より吾輩か讀うゝ文字の行烈をゝを見るが文字い詞ハ使ふ者ハ何用でも使ふ者い其事情の手軽く

解ず使の辨理らと思ひの外其況譬バ南へ急用に
行使ずつぎと北へ廻りくどひ道をもつて文躰もこれり又
豆腐のやうな用事ふ切石の口上を述てかんドんの用
の足らぬを見てを馬鹿を利効ふもる能書みぞい
可成らけ解らぬやうに珍文漢の寝言で針わどの
事を棒ずぶ劫し尊大ふ搆へて函者の玄関ふ鼻
の先を高く見せねバ藥九曾倍の利も薄くんされず抑
吾瑞穂の國い地球中亜細亞五大洲の中東上總れ
夷隅郡ハあ[illegible]ようり鶏鯆ず澤山網ふかゝる目出度

神の代の少彦名命を以て本朝函道の祖神とし扱漢
土あてを炎帝神農氏を以て函の祖ともてイヤ又此ように
シャツポを冠て社下を着さもうる文躰かんい他い鬼も
角吾肩ずそうにさるぐ泥中へ踏込で濱まつてだうも
ぐい筆の脚ず先へハもも仮今世上ふ無類の妙藥を
賣弘むる函者ず其効能書に認るふ肩ず張て按ア
そのこと湯屋の膏藥みぞ張ようるまでを菩婆扁鵲の
椅子の上ふ衝立とも成らざるもぐらぐり筆意ハ例れ
如くふ姿形ふもも[illegible]かまるで素足の筆ふ文勺の尻を

「都て技藝人の
馬鹿々々しき
業をして一坐の
機嫌をとる
ひとえに
客の懐を
ひらかせる
あの
活計のまど
真めらの
馬鹿あいらべ

「冨家の馬鹿息子
金銭の
さえに
ちやほらして
自分
免許の
利効者と
思へども
終に家産を廢して
馬鹿の性躰を
ていたらくものくるり
是等は皆上等の
馬鹿の部類と考へべし

さんざうりん走書い無造作あるとも御法度を顧
まず文勺の尻をさゝるゝふも筆の素足へ盲島の股引を
ちゝせ夫〳〵後前見ぶふ走う書きるしも安心あるま
ど医者の筆ふめ〳〵嶋の股引い似合れもへ此横町
ふむつ〳〵いる長唄の師匠さんが内職ふきる目
利安の股引が医者の身あい相應きるまぶ夫をきるせて
文勺の尻をきる若躰書の書躰がきるゝて薬が賣
ぎい賣ぬまぶと筆も覚悟の走るがきい無面目ぶぞ
かぶりゝせ偖昔〳〵和漢さのふ名医が沢山ゝるまぶ

中ふ竹を親として箏の世ふ數〳〵棒ふ生さお医
者もゝるまぶ名詮自性数を以て性〳〵五尺の躰の
病を癒きふ富士の山を張扶ふきるおどの書物
もぶき元大の和合躰を診察して苦ひ薬や針
按摩神仏のお守まもも斃きる者いきをまきて
就中七ちぶもゝるうして中昔の狂句ふ○現在れ
親の敵ふ五分禮よくも讀〳〵其五分さん當時い
九分一匁と價を上しふ病も悃仰天して身を縮されば
こゝ今の一帖い昔の三ッ一貝引ふ〳〵の現金あて水一

盃半を一ぱいふ生姜い這入ど魂ぶ去りて後ば熱る
まだを慥ゑまども其病者が一時過てたちうと去さ
えぬもたうり剝へ近年い西洋各國の名医航海して
吾日本の地を踏付世界第一の鬚を撫て懈剖やら
水藥の妙を妙でも斃る者を貴人もやつぱり
窪抹の雲助となるされどもいろく妙術ふ手を尽し
病院も諸國ふ殖るときくがいまだ馬鹿を癒さ
藥を用ひまゝそを昔うゝ馬鹿ふ附る藥いろ
あらゆ千金をなげうさんと用うる詞をきゝ及ぶせ

方今開明進歩して官殿及び市店まで美麗
堅固ふ建かゝる世ふ生類の長霊様ふ馬鹿ゞ多く
たらまーて い正身の馬や鹿ふ面目もるけ見ば私を
たゞも普く馬鹿の根を切て是見て是万物の霊
玉へまんるものゝ他生の物ふ誇らんを朝暮奮発
希望せーゝば或日二朱で八束の薪を買しふ其束の
中ふ霊光赫々たる一枝あるふ驚き是こそ所謂菩
薩が得しゞたの藥王樹と秘蔵せーふ其夜まゝ霊
夢のうちふ東方加護の医王善逝より瑠璃の壺を

茶屋旅籠屋の
戸障子あるを
貸本のうち
無益の樂書する



まゝゝ髪結床
往来の
女を見て
ざま口を
まく者又
犬を噛あらせ
或ハ牡犬を牝犬に
合るぞさる
さゝ者い是等
皆下等の
馬鹿の部類
なり

授り斯霊物二品手ゐ入らへい医者ゐるりても鬼に
錬棒と其壷の内へ藥王樹と雲中の泥亀海底ゑ
月の影天狗の鼻の垢等を加味して黒焼ゐし日
本一の黍團子と煉合せあんぐん丹の名もおうしく
徳平の膏藥と号てい亀鼈の藥ゐもがへば是を馬
鹿を利効ゐさら藥もへあらさるゐ名を馬鹿利膏
と名づけ吾も医者ゐるまび名を帯村毒庵もふる
めしけまび極新しく早井傳信又い安井郵便又
い奢錬道又ハ品野大安もようけまど医者い名を以

ても人ゐ用心させらゐ仁術なり殊ゐ俗躰なりまび石
水阿武内と名を定め遠さを慮まびこゐ國のものを
発明ゐさまびとて外國より傳染の患もうまび追て
い各國へ藥の出店取次所も出さ〻さゐ先内國へ賣
弘んとさまど是まで賣藥のうちゐ能書程ゐ効の
るき藥さめぐわまびり夫等ゐひらく見るさまて
口ありさ人活物を以て試験せゐ百射百中の著
えさを明細ゐ演舌さまび其證をして御求ぐざる
べし偖何の地ゐも上等下等の馬鹿い若干もうまど

藥力の試驗もたやすくうんと思ひしに尋ねるとなき
あやまりと私い馬鹿で御座候と名乗て出る者一人もなけ
れば殆ど去げんに當迷せしぐ世の諺に馬鹿の大飯といへ
ども一ぱい差づめ大飯をくへ眷米屋をたづね車引輕
子の類を普く尋ねるに獨として彼等の中に馬鹿な
るものなし米眷い一日に一外五合の大飯をくへども年に三
四十両の稼賃をとり吾脂汗を漬上て終に一家の旦
那となる越後信濃より出る者も雪間を稼で國へ戻
れば是りて馬鹿にならべ又車力輕子のさぐひも朝早より其

日の糧を力に稼ぎタに戻りて妻子とよく養ひ坐食する
者と見ざるべへ是を尋に三日暇を費して吾とそ馬鹿に
なりさまと是い修行の馬鹿と心を励し猶馬鹿なる
者い釣する者とくば大川の岸を尋ねるに両國橋の辺に
百本杭に釣する者二三人ありしかば嬉しや馬鹿を見
付しと思ひの外一人い一尺余の鯉を釣上其外のビクも見て
さへ小鮒もなく鯊の四五十もあるべ褒さまでいみけま
ども試に用ひる馬鹿にもならべ此釣を見てゐる者を又
大馬鹿の譬もあるべ側なる人を見てなほ前方い大

馬鹿ゑへ馬鹿の藥を附よとゝのへバ其者等腹をさゝえ
他の釣を見てゝのしむも雪月花を詠てゝのおも樂い
かるゝことを大馬鹿とゝ汝こゝて藥を附よとゝあ付らま
腰を見まゝいつのまゝ煙草入を切ゝまゝていよゝく馬
鹿ふさゝまされバ凝てい志案ふあさハゞと夫より其日い
気をかへて喜昇坐の芝居へ行しゞ折しも板東雀
蔵ゞ馬鹿の槃持ゆて大入ゑまゝゞ
是幸ひの試処と桟敷の端へ割込ゝ

馬鹿の大妙藥上終

此讀續早々発兒仕候


小說新話

著者　静岡縣平民　服部應賀

出版人　東京府平民　山崎清七　小傳馬町三丁目十六番地

驕人びつゝ箱　鬼美だんぶ　修身千代見草　虫類大議論
諸藝畑水練　孫兵衛活計論　方今身代だゝ　童女早学文
近世あきゝ蓑　各覽會　智恵の秤　當世利口娘
天上大珎事　懲面抜ばこ　權兵衛種蒔論　同二　蹄
東京花毛抜　二ヤ〳〵チウ談　金庫三代記　青楼半七通
馬鹿の大妙藥　市の虎狩　書
日本女教師　活論学門雀
みゝ〳〵男　賞罰天カラフル
太郎兵水掛論　御弊あ法ぎ　林
ぎつゝり懲面箱　ノンベングラリ

新大坂町　鶴屋喜右衛門
芝三嶋町　和泉屋市兵衛

# 馬鹿の大妙薬

中号

服部應賀著

定價三錢五厘

西京書林 勝村治右衛門　信州善光寺 小枡屋喜太郎
大坂書林 秋田屋太右ヱ門　同 上田 鼠屋甲造　野州栃木 叶屋儀右ヱ門
長崎酒屋町 安田與平　同 長野 鳥屋弥兵衛　同 立川喜平
箱館 魁文社　越後三條 浅間傳右ヱ門　同 [illegible]屋清助
名古屋書林 永楽屋東四郎　同 高田 藤屋直三郎　同 [illegible]屋利兵ヱ
甲府 藤屋傳右ヱ門　同 水原 島屋六平　同 [illegible]遠忠平
同 八日町 西川庄右ヱ門　羽前山形 荒井太四郎　同 西江屋宥造
駿州沼津 擁万堂壽三郎　常陸水戸下市 勸興舎　武州川越 岸田屋文吉
同 後藤仙造　仙臺 管原屋安兵ヱ　同 八王寺八日市 小町屋德二郎
静岡江川町 杉本平七　上州沼田 山田屋金兵ヱ　同 熊谷 近江屋平吉
豆州修善寺 柏屋勇三　同 高崎 文心堂源作　同 横濱 師岡屋伊[illegible]
同 修善寺 後藤喜助　同 安中 千巻屋喜平次　同 中屋銀二郎
同 中屋幸吉

西京書林 浅草寺門前 信州善光寺門前 野田屋本店

趙高の鹿を
さして馬と
茄保茶を
見て
胡瓜とも
共ふ古今の
驩々史記を
見るべし

# 馬鹿の大妙薬中号

服部應賀著

○

夫新發意槃特を三國傳来の如来と共ふ世上へ馬鹿の名を高く弘しが此俳優を鶴蔵能つとめ光陰の矢も人情の的ふ當まび客の頭も桟敷土間へ朝より植る如くふあるび一日の時間をあふ費て大入を見まび此馬鹿の槃特い馬鹿ふもあらねば是もまた試ふあるぬと其價の半を見捨て木戸を出まび其

茶屋々々の店先ゟ花を飾て奉納と為て品々陳列せり是を何処への奉納と聞ば是い當狂言大當りあて一坐いのちろん茶屋仲賣まで也大儲といふ事是偏ゟ釋尊のお影なるべし幸ひ両國回向院あて嵯峨の釋尊お開帳あるゟ夫へ奉納する品といふ誠ゟ馬鹿げしことを聞ものゝ仰此狂言の創立を今より三十余年ゟ吾天竺の佛説ゟ諸経の中より抜萃して專ら寓言を以て自國の人情に摸擬なるべ既ゟ倭文庫と号爾ゟ其筆意を其侭ゟ



其大當りの冥加を嵯峨の木像へ備へ吾ゟ為ものゝ仏ゟ為るもの奉納の道も亦夫でも逆ゟ為ると責るべ彼等又信心強情ゟ募て目蓮冨留那を代言として此返答を辯解ゟおよび吾も又當時流行の身代限りの智恵を振て其冥加を採理ゟ伏せどかゝる冥加を喰て馬鹿ゟるのい元より好まべ此外又浅草奥山る生人形の見世物も古今稀る大當りゟて三四年の今ゟ閲業をつゝ一るゲ是も又我著しる西國三十三番の観音圖繪を資本として永戸

銭中銭の外ゐ賽銭まづを投さてまづ吾へ一言の礼も
るさ尻喰観音なり彼とつひ是とつひ胸ゐ手とあて格
別ゐ考へて見まづ拙るた筆の世ゐ栄て百万人の看
物とるるゐ是が則ち自他平等利益と発念せ㋐へ其
奉納物を三拝して利効めっして其場を立さり夫より
又馬鹿の名所とまく深川の濱邊へおりもた馬鹿け
もとこと蜊蛤を賣者を見るゐ此邊りい都て七八年の
童ゝるくごもるづらの元手あて朝より其日を営ミ貧者
い見もまど馬鹿い見へざる㋐へ此先何を以て試まべき

と邊を詠もまづ遥ゐ馬鹿囃子の聞へくまづ其神社
へ行て見るゐ折ゐ二十五坐の神樂ゐ馬鹿の舞さ下
ままづ暫く是を見るゐ数多の見物を目下ゐ集た
「人馬のちゃしゐつまて馬鹿いトッピトピノヒと踊見物ゐまづ
トッピキピと首とふゝまる足どり抔いるゝく馬鹿とい見へ
ざりける扨是まで馬鹿ゐ由縁の者と彼是と尋て
馬鹿暇を費ー茲ゐ其數をも尽せどいまづ一人の試験
もせぬる余り馬鹿々々ーきとと夫より又馬鹿ゐ因
ある神仏を考へて見まづ佛ゐ馬頭観音なり神に鹿

嶋の神社あまべ此両名の頭字を仏神混合ゐ稱へて
安宅の渡船ゐ乗るまべ其船の中に一人の男舳先に
懐手のまゝ衝立を見て船頭掉をさゝるゞ。そるゐ方
立ていあぶるひ下ゐおぶまといへば。十二あぶるいるゞあるゆゝ
と鼻唄をうゝゐを見て船頭腹をゝち扨々世の中に
馬鹿ゐ附る藥いるいるゆゝ。けゝゞ高くも買るゝゝ声吾
耳ゐ入る時もゝき此舟の中ゐて吾妙藥と求るゝゝ
誠ゐふぎのゝと思ふうち其船岸へドサンとあるまべ
件の男懐手のまゝ川の中へ真逆まゐ落てあふゝくと



手足をゝがけゞ船頭大音ゐ。夫見さゝるさゝといゝて今馬
鹿ゐ付る藥があゝゝ買るゝゝと船を彼
方へさゝゝるを見て。吾其藥ゐゐけゝと懐より藥
紙をさゝり出し鼻のゝゝ張付て。智仁ぶのゝ御代れ
御宝と首をさゝ延まべ其藥力忽船よりも早く波
をゝゝゝて渠を吸よせ百死一生の馬鹿を助る。此
藥の試験是を始ゝて爾るゐ乗合の者舟より上り
て吾袖をゝゝてあゝうの茶店ゐいゝゝ扨一人のゝゝ私い
深川の湯屋桶八と申者るゞ即ち今日紀元二千五

船中あん
馬鹿
利膏の
藥力を
うけ

下等の
馬鹿を
吸よせて
水難を
たすく

百三十四年六月ふなづめて馬鹿の妙藥を見まゐ袖
濡合も御縁とおぼしまして紙書とお藥を求こうとゐば
天い何よりやすきこゝろみまゐ今日おゐふ紙書いかち
合さゐが此靈藥い藥王樹しらへ物を加味されば利
効と馬鹿の腹も見りまり又雲中の泥亀もたいまゐば
地下の馬鹿とも天上へ吸あげ又海底の月のかげも
さゐまゐば天上の馬鹿とも地ゐ吸さげ四方八方処さら
ば大馬鹿小馬鹿の妙藥ゐり我住所い閑花町一丁
目あゝ口ゝゝ出まゐせの出格子ゐ馬鹿利膏の看板

あり名い石水油内とゐのまゐ桶八悶し顔ゐゝ。御住処い慥
ゐりまゐ先生ゝゐ石水油内先生といゐ医者の名とゐりい
まゐせゐと笑へば汝よくきみ近年石水が舶来しゝより諸
々方々あゝ怪我人多くゐる中ゐも横濱の芝居あゝを種
紙あゝ損をしさうへランプが頭へおつこちゝゐりあゐたゐゝ焼
死ゞ者もあると聞ばあゐゐい物を家ゐ置て用心をまゐより
も平和の物い用心もいゝゝ孫が其安心と徳用を仁術ゐ示す
吾名ゐへ秋葉山のお札より我名を柱ゐ張おゐて朝夕
是を見ゐゐゝ扱湯屋殿い何の為ゐ馬鹿の藥が入用し

きけば桶八がつねさまが湯屋なれば湯屋馬鹿といふべけり先
男湯の馬鹿とはいはゞ蛇喰口又水桶のきわに立ちごろ
てあたりに人のゐるいとひの見さかへもなく湯水をざぶ〳〵と浴せかけ
また其あたりの掛ッもし者と喧嘩がでさて迷惑をいたさせ
まてけりし又女湯の馬鹿といふはて湯屋へ容ふでも来る気
り衣物を着替て白粉やら上下のシヤボン糠袋軽石糸瓜
を御持参なさいまして木患子をやつきとなりて磨きなさるが
清盛さまが火の病に水をお浴なさるごとく湯をつかひなされ
てなる五六十文では引合ませぬ是等のお方への施薬なりとも

損でござりますが何卒取次賣がちかひとらへ出ません皆下
等の馬鹿の部類より薬も澤山に及びませぬ此即効紙れ
ごさを十人ぐらゐに用ひてよし今日は弘のため無代なんどと
すと渡せば悦んで持かへる是を見て私は馬喰町鹿島
旧平の妻なるが誠に箸にも棒にもかゝらぬ馬鹿
息子を持まして二親とも甚ご難儀に及び既に今日渠
がことに親類共へまで申しましたを迚もおの馬鹿野郎
めなれ付る薬もなきより御上へ願ふより外なしと。相
談をば究。今かへり道の舟の中にて薬の奇特を見ま

ままに何卒私へもと頼み多き疾下等の馬鹿の試
い濟しがいまだ中等以上の試とせんが近日其許の家へ
おりむきて息子に藥をあたへんとの。誠に勝手がよく
も思召さんが右い馬鹿の大病人のためにはしも早くお
見舞ぐさまと戻てる其あとに一人居のままの。其方い
藥が入ういうぬるうちや返らまよ吾も帰宅を急ぐ
促せば私い昨日或御役人さまの処へお招ぎにあづかり
種々御馳走のうへで仰らるるい此度近國にて金山を
見出せば其山の上へ井戸を堀て金銀を汲上る新発明

も調ひ多ぶ其器械を求めるに資本が足らぬ貴様
此業に金を出せば利足い六分の日分のうへに是が成就す
時い井戸うち涌金銀ならば湯水のごとくにつかはれば
澤山汲でのけと仰る丈い誠に井戸より深ひ思召
さぶらへ其器械い舶来直段いどうひと詞へ
にに舶来にて凡三千圓の品るぶ別人此目論を用ひず
て無理に千圓を吾へ渡し手も濡さず金銀の抓ぶりの
加入を頼めばあとに二千圓ばかれども是を咄せば又出金する者
い沢山ひまと此ままを儲口を疎縁の者にさせるよりも懇

意ふまうせて私へさせてくださるもの仰をさく是い誠ふ懐手
あて金銀の喰飽をもる居膳とつのまれば今日御圖をさく
見まば案のごとくふ大吉がうで夫ようう又大名人の卜者ふ見て
のくくば是ほ又大吉ふれば大大吉吉の身の上ほへ折角の
思召を無ふいまそいふ気の毒ふぐう私馬鹿の藥い入ようせ
ぬが右の御風聴をいささんふあふ痩をさくしておてまくほへ
一足お先へ出ふけまずと茶代ほおうで立去りうまば茲ふ其名を
角ざりーが是いまにく世ふ名高き三太郎どのうべ—
馬鹿の大妙藥中号 終

小説新話

著者 静岡縣平民 服部應賀

出版人 東京府平民 山崎清七 小傳馬町三丁目十六番地

驕人びつくり箱 鬼美だんだ 修身千代見草 虫類大議論
諸藝畑水練 孫兵衛活計論 方今身代なるし 童女早学文
近世あきなき蔡 各覧會 智恵の秤 當世利口娘
天上大珎事 懲面抜ば 權兵衛種蒔論同二 蹄
東京花毛抜 ニヤアチウ談 金庫三代記 青樓半化通
馬鹿の大妙藥市の虎 狩
日本女教師 活論学門雀 書
みるまうり男 賞罰天カラフル
太郎兵水掛論 御弊あはぎ
ぞつくり懲面箱 ノンベンダラリ 林

新大坂町 鶴屋喜右衛門
芝三嶋町 和泉屋市兵衛

西京書林 勝村治右衛門　信州善光寺 小枡屋喜太郎　野州栃木 叶屋儀右エ門
大坂書林 秋田屋太左エ門　同 上田 鼠屋甲造　同 立川喜平
長崎酒屋町 安田與平　同 長野 萬屋弥兵衛　同 糸屋清助
箱館 魁文社　越後三條 淺間傳右エ門　同 安決 万屋利兵エ
名古屋書林 永樂屋東四郎　同 高田 藤屋直三郎　同 宇都宮 田野邊忠平
甲府 藤屋傳右エ門　同 水原 島屋六平　同 西江屋宥造
同 八日町 西川庄右エ門　羽前山形 荒井太四郎　武州川越 岸田屋文吉
駿州沼津 擁万堂壽三郎　常陸水戸下市 勸興舍　同 八王寺八日市 小町屋德二郎
同 後藤仙造　仙臺 管原屋安兵エ　同 熊谷 近江屋平吉
静岡江川町 杉本平七　上州沼田 山田屋金兵エ　同 横濱 師岡屋伊兵エ
豆州修善寺 柏屋勇三　同 高崎 文心堂源作　同 中屋銀二郎
同 修善寺 後藤喜助　同 安中 千巻屋喜平次　同 中屋幸吉

# 不肖子三變

不肖子
一變シテ悪友ニ
交リ悪酒ヲ
浴テ泥ン犬トナル

同ジク
二変シテ藝妓
娼妓ノ龍泉ヲ
嘗テ馬鹿ノ剥身トナル

同ジク
三変シテ
窮猗トナリ
親族ノ肉ヲ喰

# 馬鹿の大妙薬下駄

服部應賀著

窮猗ヨルヒネル

馬喰町鹿嶋旧平殿お宅ハ是ふるゝ馬鹿医者石水油内御見舞と述べば女房走りいで「コレハ〳〵飯こそまづ〳〵と座敷へ通し扨昨日濱町川岸あて将馬鹿太郎の大病を願ひ度由主人旧平へ申聞まさと猶亦私ふお宅へ出ろと唯今申付らとまゝとと聞よりを油内小首を傾けて「ハテ医夫ハ不思儀のこと

う不今朝此方より至急ふ見舞くるよりの御使ゆゑ取
あへず登上といふふ驚き一大ハ誰より願ひまつるまづ
御出の儀をとい所へ旧平立出て始ての挨拶を済せば
「扨御子息の馬鹿病氣ハ何時頃よりのお発しなるや」
「さればこそ十一三の時より少し萌せば成人の上自分の為ふ
親ゞ習ハせる手習讀物の稽古を怠りて雀の雛
や小魚を汐ふ無益の殺生を叱りまつるとが聞入ませぬ
「夫ハ〳〵都て男親ハ其子の行末の為を思へども
女親ハ目の前のをのこを思へバ父の誡る業をも父ふ

隋して致させるゞゆへ自然と悪擬ふ馴て馬鹿の性根ふ成りまを
「又十三四ゝ煙草を呑ちゞめてきせるやたばこ入を度ゝおと
して馬鹿銭をもつらふせ十五六ゝ悪友ふ交りて酒を呑始め
十九廿ふ藝妓娼妓の撞も通くふ募るゞゆへ私異見をいとも
ふも親の權柄を出さゞ惣じて貸座敷渡世の一類ハ孝悌忠
信禮義廉恥の八徳を忘却するゆへ是を昔より忘八といふて
忌嫌へども若うちハ死の分限を顧て一時の脇散ふ其藝妓を
藝妓とし其娼妓を娼妓として撞ぶを何ぞ咎めん然るふ馬鹿
めらハ夫を夫とせゞふ藝娼の秘密とする甘舌の龍泉を嘗

て終ふ其親族懇意の他人迄へ其毒を売る者十人ふ
七八人いあり此龍泉の毒ハ人を殺ふも血を見ざるべ
阿尼虎列刺の毒よりもおそろ〳〵轉で扶い間ふ合ハ
と申聞くも皇の先であらひ他人ハさもいらんが我輩
ハ藝娼の方ふて此揚りもする金も貸杯と已惚鏡の
銑智氣を言ふが〳〵尻の毛まで抜をまた「仰の如ど
くぐんふ馬鹿ふ藝娼として此元をきく〳〵ぬ客へ一銭
うとも貸りのふいあ〳〵ば今の一圓ハ後日百圓ふも
きて取返さ目的がある由へあり「夫らをきく〳〵ぬ



馬鹿ふ無理非道の借金をして一夜の樂をする
此も其借金ふ債らをて十日も苦む此も同じ已
の此といふところを悟ません「夫を悟まば馬鹿ぐ
あるませれ其様ふ馬鹿ふ限つて親をせも流行
の衣服羽織などを足元〳〵鳥の立ふ仕立
させ金銭を取ことハきく〳〵ぬが遣ふハ歯を磨き眉
を細くして衣類を見せびらかしふ待ぶせの網
の中へ乗込と藝娼ハ馬鹿めがまこと親の肪汗
をたぐりて来ありとと口へ出てハ渡世ふ

ぬゆへヲヤく意氣ホおお羽をゞ今お前の噂を
ままゞ影。うんホ嬉しい。さやくお松さんへもお竹
さんへもといふより早く酒肴。孤ホ馬鹿ゞ浮さま
と馬糞の朝勘定とあると一文るーの奴ゆへ着初
のお羽をゞ質屋の藏へ着納とあらて馬鹿の
剥皮とハありませ「主いうホも人の子も四五さい
までハ親ホ尻を拭せるのハ世間るこホまゞ世以上
の大男とあつて已ゞひりちゝ〳〵金の屁をゝびく〳〵
親ホふらせまさ「医馬鹿の病も昇進をいさまと



脚氣よりも剛ひゞ其くせ死ホません「主近年新聞で親ゞ子を殺ゝこのを
見まゝさゞ其子ハ大罪を犯さゆゆゆ少しも不便ゝハ思ハぬゞ其親ゞ我
ゞ子を殺さまでホハ如何程の心配苦勞を尽さまゝとうと其親の心ゞ
皿ホつまさまて泪ゞ飜まりたものを其情もたゝぬ馬鹿
めゞ近所ホも又ありて私の名を馬喰町の馬と鹿嶋の
鹿をこ川てアノ親父めゞ馬鹿馬鹿ゆへホ息子めゞ馬
鹿ホるつて家を倒さたくく嫁でも取て宛行
バアノやりホ馬鹿銭ハ遣ぬものと利口らしく
いまさゞ子を見て親ホたうばと聖人の語ホ

駿河の國乃
堪忍を世法ふ
反對をとゞも
冨士山よりも
名高き名物
ふれを
古人の歌よ

堪忍記

○馬鹿娘
父の
顔へ
泥を
ぬる

堪忍記

堪忍記
かんにん

○馬鹿の
女親
うつくしい
提灯とりの

○馬鹿息子
父の肉を
はむ

○馬鹿の悪友
尻押を
する

ゐる如く我子の品行を何躁ふ見るものあらば男女の配遇ハ古例ふならびとも十七八以下ふて要ず若死の患あり然るふ十六七より大酒婬蕩ふ恥る子へ其難を止めんとて猥りふ嫁をとり咎なき他人の娘を疵ものとし衣類道具迄をるく すて離縁せる者も多し又放蕩の子へ嫁さへことを実躰ふ躰ふなると極まるものならば妻子持の息子等ふ放将ハ なき筆なるが是も府縣ふ多くありまして誠ふ其やうな若氣の馬鹿ふハこまりませ〔主〕イヤ私どもの馬鹿ぬハ少しも若くハありませぬ〔医〕それでも三十以下ぐハありませぬから〔主〕年ハ



三十以下でも百年も樂ふ暮さるる衣食の償を最早取越て喰尽し〔医〕ることハ百年の老人でありまして〔主〕ある程さもう其若老人ハ今日何もへお出あさもて〔医〕只今奥の一間ふ酔倒てゐるをさいまい何卒御診察下されて〔主〕然らバ内密ふ御容躰をと夫婦の案内ふ従て熟其乱形を見さげ元の座ふ戻りて溜息をつき〔医〕ア・是ハ手おくれ。最も馬鹿の病が変躰して窮猗病とハ難症ふおらとうそも窮猗といふ獣ハ悪人を愛し善人を養育されし父母の肉をもくらひ悪獣の病とかたるまでふ何故

歩捨おうきゝとぞ主聊お捨置あゝあゝぬが近年刑罪の軽くあうしうを侮る馬鹿とあれば懲治檻懲役あて三五年赤き懲衣を着しうるとて鉛が銀ゝ換りもせまじとその日〳〵の天道ゝ任せ置しが其内ゝ悪病ゝありうるうして昨今の謄言ゝハ是近親族ハ勿論他人の金銭品物迄貰ひもたる借りもたるとど一戔一品返さぞ口ゝハ大言を吐ども煙草一戔買稼ハ為〳〵ぬが呑あるとゝ酒ハ一日も呑ばゝハ居られぬゆゑ我心でも我儘ゝ持あるゝていとゞ金や衣類を盗ゝ出さるるのゞ剛くば懲役あうとも首を切とも手足をうばゝとも御勝手次第ぞうがゝして懲場のゝ飯も喰て見さい新聞ゝも出されて見さいと聞ゝも見るゝも忍の緒がきれて昨日家内を以て親類の方へ訴訟の調印を取ゝ遣せ一途中ゝて先生ゝ御目ゝ掛るといふハ是天のゝ引合るゝば是非とも薬ハ下さるべ一斯難症とあうてハ上等馬鹿の妙薬ヨルヒネルとゝ眠り薬をおくふべ一昔漢ゝ千日眠る酒あうしゞ此霊薬を万日眠るあう病の癒る者ハ必七日の中ゝ目を覚さ何を兎も角も万日の間飯も喰ゞ酒も呑ゞ他行もせざゝば再帰来の御上の御左介を願ふうも手軽けゝば酔眠中早く用ゆべ一

と一貼の藥を渡して立上るべ夫婦ハ両袖ヲまくりて「河ハあくとも」「イヤ夫ハ御無用都て病人のある家ハ何くれと世話しき中ヲ無益ヲ永居をして酒抔呑医者のまうでハ馬鹿の藥ハ弘めぐ〳〵とそこ〳〵ヲ戻りける偖其翌朝油内の宅へ彼病人来りて云「私の本心本躰を悪獣の悪心ヲ奪ハれて久〳〵戸外ヲ迷ひ〻ぐ昨朝親の使と偽りて先生を願ひ首尾よく本躰へ復心い〻〳〵るお禮の上ハ一ツの御頼あり」「夫ハ何なりのと扱其頼とハ」「今日ヲ至りて此ヲ余る大罪を後悔致し〳〵れバとて報恩ヲるる業もかけるべ一命を捨るぐ由へ此段を父母へ」「ヨツトまて〳〵れよ貴殿今とあつて首を縊る此を投るゝまれバ是まで湯水のごとくヲ遣ひ捨る金錢ぐ残らぐでなくとも半分ぐ〳〵ひハ親の手元へなるるゝ」「夫ハなるく」「さもいな〳〵人其外ヲ又何ぞ命を捨て親の為ヲるるとぐあるのゝ」「イエ何一ツ為ヲるるとハるけるとども生てハ顔ぐ合されませぬ」「る程夫ハ右るるぐ夫程迄ヲ覚悟をいとぐ今ゝ姿を陰して紙屑を拾ふともランプの破を買あるくとも土方人力車るるを奮発をして他人の二人分を稼ぐ一年ヲ十圓前後の金ハ残るべ夫を三年積で其六三十圓と辛苦の此を土産ヲして両親へ對面をするのハぐらでおろう」「いろ〻ヲ夫るゝ今ゝ小を積で大とする辛苦をせめて後悔の印といくさん」「そぐさるお暇」「アヽこれ〳〵走り馬ヲ鞭ともいへバ些少るるとども我志の一圓其資本ヲせゝるまよ」「おヲ志い難有きぐ斯決心の上ハ一戔

ようとも他力あるゝ共効薄し早くば二年遅くい三年あい急度御禮申上るゝと奮発心を顕て立出ける是を上等馬鹿の試験の効能とさるべ此大妙藥を以て馬鹿一切の根切をせよと石水油内謹で府縣の御馬の耳へ鹿しゝ

○本文の馬鹿太郎姿を隠して昼夜奮発の念力よう満二年不百圓の金を稼ぎ出しこの金と三本の辛棒を造りて是を後悔の杖として父母ふ捧て萬謝せしを誤者千人中の一人といへべし諸生徒君ゝとを小説と見侮るゝとおろと

馬鹿の大妙藥大尾

明治十二年十月二十日御届

著者　静岡縣平民下谷西町三番地寄留　服部應賀

小説新話

騎人びつゝ箱　鬼美だんぶ　修身千代見草　虫類大議論
諸藝畑水練　孫兵衛活計論　方今身代だるま　童女早学文
近世あきゝ墓　各覽　會智恵の秤　當世利口娘
天上大珎事　懲面拔ばゝ　權兵衛種蒔論　同　二、雉
東京花毛拔　二ヤアチウ談　金庫三代記　青樓半化通
馬鹿の大妙藥　市の虎狩　書
日本女教師　活論学門雀　林
みるきり男　賞罰天カラフル
大郎兵水掛論　御弊あはぎ
ぶつゝり懲面箱　ノンベングラリ

著者　静岡縣平民　服部應賀

出版人　東京府平民　山崎清七　小傳馬町三丁目十六番地

新大坂町　鶴屋喜右衛門
芝三嶋町　和泉屋市兵衛

010190525037

西京書林 勝村治右衛門　信州善光寺 小林屋喜太郎　野州栃木 叶屋儀右ヱ門
大坂書林 秋田屋太右ヱ門　同上田 鼠屋甲造　同 立川喜平
長崎酒屋町 安田與平　同長野 蔦屋弥兵衛　同 糸屋清助
箱館 魁文社　越後三條 浅間傳右ヱ門　同安沢 万屋利兵ヱ
名古屋書林 永楽屋東四郎　同高田 藤屋直三郎　同宇都宮 田野邊忠平
甲府 藤屋傳右ヱ門　同水原 島屋六平　同 西江屋寄迁
同八日町 西川庄右ヱ門　羽前山形 荒井太四郎　武州川越 岸田屋文吉
駿州沼津 權万堂壽三郎　常陸水戸下市 勸興舍　同八王子八日市 小町屋德二郎
同 後藤仙造　仙甚堂
駿州三川町 杉本平七　上州沼田 山田屋金兵ヱ　同熊谷 近江屋平吉
豆州修善寺 柏屋勇三　同高崎 文心堂源作　同横濱 師岡屋伊兵ヱ
同修善寺 後藤喜助　同安中 千巻屋喜平次　同 中屋銀二郎
同 中屋幸吉